

晩秋の北陸・信州旅 Report & Pictures

開業直後の北陸新幹線に乗る

もう 30 年近くも前から、いつか機会があったらと思っていた。現役時代に聖教新聞の特派員としてパナマに駐在、10 年間にわたり地理的に広（荒）大なラテン・アメリカの国々を回っていて帰国したとき、日本の箱庭的なしっとりとした光景と、わび、さびの心が残る土地を訪ねてみたいとの気持ちがあったからだった。



その一つが白川郷の五箇山と小京都といわれる飛騨高山だった。

9 月初めに JTB が企画販売していた 1 泊 2 日の団体旅行。開業したばかりの北陸新幹線で富山に入り、貸し切りバスで白川郷と飛騨高山へ。泊まりは奥飛騨温泉。翌日は穂高ロープウェイで 2000m まで登り、最後に紅葉の上高地を訪ね松本から中央線の特急で帰京、とのコースだった。一人 3 万円。ありがたいことに、このプランには岐阜県から一人 5 千円の援助金が出ているということだった。

11 月 5 日、東京駅から新幹線に乗り込んだ。外観も車内もピッカピカ。座席前テーブルではパソコン操作もできるようになっている。それに前座席との間がこれまでの車両より 10 センチほど広い。窓際の人トイレに行くのにも隣人に迷惑をかけずに出られる。そのトイレもウォッシュレット付きで最先端の設備。

富山まで 2 時間 32 分。子供の頃、北陸方面から首都圏に出るのには 6 時間から 8 時間かかっていたことを思うと、本当に早くなったものだ。一方で、ゆったりと旅情を味わいながらという旅の楽しみが消えつつあるのも寂しい思いもする。

「狭い日本、そんなに急いでどこへ行く!？」なんて標語もあったっけ!？」

“日本的”を今に残す合掌造り

五箇山の合掌造りはやはり郷愁を誘う。信州に生まれた自分が子供の頃は、村落のほぼ半分が萱葺き屋根の家だった。三重、四重に床がある白川郷の合掌造りほど家は大きくはなかったが、中の土間では馬などの家畜も飼っていてほぼ同じ趣だった。

20 人乗りほどのミニバスに揺られて展望台に登った。旅行雑誌やポスターで見る村の全貌がそのまま広がっている。雪の積もった夜にライトアップされたら、さすがに幻想的な情景になるだろう。

1995 年に世界遺産に指定されてから観光客が増え、この 10 年ほどで訪れる客層はすっかり変わってしまったようだ。外国人



観光客の驚くべき増加! とりわけ中国人の多さには圧倒される。容貌は日本人に似ているので区別が難しいが、彼らはどこでも大声でしゃべっているのですぐわかる。

しかも、欧米系の観光客のほとんどが個

人か数人の単位なのに対し、中国人は貸し切りバスから団体でぞろぞろと降りてくる。ここでも“爆買い”で村には“貢献”しているようにさえ思われたのだが・・・

歴史や美観を残す行政のあり方

秋の日は暮れるのが早い。午後4時過ぎに到着した飛騨高山は快晴なのにすでに陽光が陰りつつあった。江戸時代以来の城下町・商家町が保全されており「小京都」と呼ばれている。その中心とも言われる上三之町を散策した。

幅4メートル、長さ500メートルほどの歩道の両側には、黒色の造りの土産店や宿がならぶ。2階建てでもなぜか低い。ガイドの説明によれば、ここを治めていた武家の家より高くしてはならなかったからという。それで結果的にきれいに整った街並みができただろう。



余談だが、大学を出てNHK学園高校の教師をしていたほぼ半世紀前、高校のある国立市には建築物の高さ制限があったため、一ツ橋大学前の大通りを初め街は誰もが憧れる美観が保たれていた。

だがその後、建設業界の資本の流入や住宅事情、市の行政の方針変化などもあって今は高層マンションが並び立つ中央線沿線の他市と同じような、ありふれた街に変わってしまっている。歴史あるいは美観を残すという視点からは少々残念な思いもある。

絶景の連続：旅の9割は天候次第！



奥飛騨温泉郷で一泊した一行は翌朝、貸切観光バスで新穂高ロープウェイに向かった。

ロープウェイは「第1」と「第2」に分かれていて、パンフレットには、第1が全長573m、高低差188m、定員45人。第2が全長2598m、高低差845m、定員121人で「槍・穂高に一番近い展望台——日本唯一の2階建てゴンドラで標高2200mの雲上へ——」とある。

午前10時。快晴、無風。展望台からはすでに白雪を冠した北アルプスの連山が手をとるように望めた。高さでいえば郷里の中央アルプスの西駒ヶ岳には2600mまで登るケーブルがあるが、連山の眺めのよさではこのロープウェイにかなわないだろう。大人の往復料金が2900円とかなり高いが、建設費や維持費を思うと納得できる（ただし、我々は団体料金で300円ほど安くはなっていた）。

帰りのバス車中でガイドが言った。「旅の楽しさは本当に99%が天候次第ですよネ」。至言である。もし雨が降ったり、風が強かったら「わしゃ、バスの中で待っているから・・・」と行かない人も出てくるであろうから——。

「ワタシ温泉大好きナンデス！」

ロープウェイからの帰路、ガイドは溪流沿いにある露天風呂をいくつも紹介した。

その究極「ひらゆの森——人気の温泉リゾートで日帰り入浴」。風呂の8割は露天風呂。男湯の場合いろんな大きさと形をした露天風呂が広い庭園に7つほどあった。その一つでたまたま来日しているオランダ人と話しが弾んだ。

すらりと背が高く骨格もがっしり、男性自身も私よりかなり大きい好青年。湯煙りの昇る湯に浸りながら英語で10分間ほど。兄が大阪に住む日本女性と結婚した。今回その大阪に行くために1か月間の休暇を取り、まず奥飛騨の温泉に入りこの後、東京、日光、富士山を回り大阪に入るという。

「1か月間の休暇なんて羨ましいですね。日本で1か月も会社を休んでいたら、出社したときには自分の机がなくなっていますよ」と、誇張と冗談を加えて日本の労働者の現状を伝えた自分。

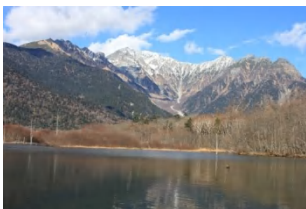
「日本人の働きぶりは義理の姉から聞いています。でもそれはヒドイですね。オランダに限らずヨーロッパのバケーションはこれが普通ですよ」と同情気味の青年。長時間、湯につかっている額には汗がにじんでいる。

「じゃあ、日本滞在をうんと楽しんでね」

「アリガトウゴザイマス。ワタシ温泉大好きナンドス！」

つい長湯にこちらも身体全体に汗が出てきたのだった。

写真の撮影に感謝される幸せ



旅行の最終点の上高地。バスから降りた一行は大正池から河童橋までゆっくりと歩き上

っていった。約1時間半。大正4年の焼岳の大爆発で梓川がせき止められてできた池にはかつて多くの立ち枯れの木があったが

今は数えるほどになっていた。池から望む山の峰々は冠雪し、池の周囲の木々もほぼ紅葉を終えていた。梓川のせせらぎはあくまで透明で鮎の泳ぐ姿も見られた。

途中にウェストン碑とレリーフがあった。日本アルプスを世界に紹介したイギリス人宣教師を称え記念する碑である。氏のお陰で今の上高地の繁栄があると言っても過言ではない。

河童橋：上高地のシンボルだ。幅3.1m、長さ36.6mの梓川の上にかかる吊り橋である。あらゆるパンフレットや旅行雑誌に写



真が掲載されている。私も川辺に降りカメラを構えているとバスで一緒の母娘に声をかけられた。

「シャッターを押していただけませんか？」

「いいですとも。喜んで」

私は渡されたカメラを覗きながら撮影角度を少しばかり工夫した。再びバスに乗ったところで二人がやってきた。

「こんな素敵な記念写真を撮っていただいたのは人生で初めて。大きく引き伸ばして部屋に飾っておきます。本当にありがとうございました」

と何回もお礼を言われてしまった。いつもの調子で押したシャッターだが、もしかしたら元特派員の片鱗が残っていたのかもしれない。現役時代の経験が他の人のためにも役に立つ——こんな嬉しいことはない。私は笑顔で言葉を返した。

「モデルが素敵だったからです」